

教訓茶碗とは

沖縄県石垣島の特産品に「教訓茶碗」というものがあります。一見すると、ただの湯飲みのように見えますが、よく見てみると、茶碗の真中にはシーサーの顔をした柱のようなものがあります。

実はこの茶碗の底には、穴があいているのですが、お茶を入れても全くこぼれません。ところが、器の中の八分目ぐらいの「どこか」を境に、それ以上入れると、底の穴から中のお茶が全てこぼれてしまうという不思議な茶碗です。ただお茶を注ぐだけですが、とてもドキドキしそうですね！



「欲張りすぎるとすべてを失う」という教訓

皆さんには「一度にたくさんのお茶を欲張った結果、失敗して、全てを失った」という経験はありますか？（残念ですが、私はよくあります。「足るを知る」ということは難しいですね…）

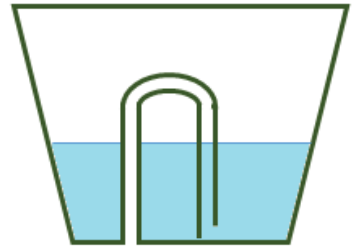
欲張ってお茶をなみなみと注ぐと、全て流れ落ちて、無くしてしまう。そんな大切な教訓を教えてくれる教訓茶碗は、どんな構造になっているのでしょうか？その内部構造を見てみましょう。

茶碗の真ん中には、お茶が流れる曲がった管があり、片方は茶碗の内部の底に、他方は外側の底の穴として繋がっています。

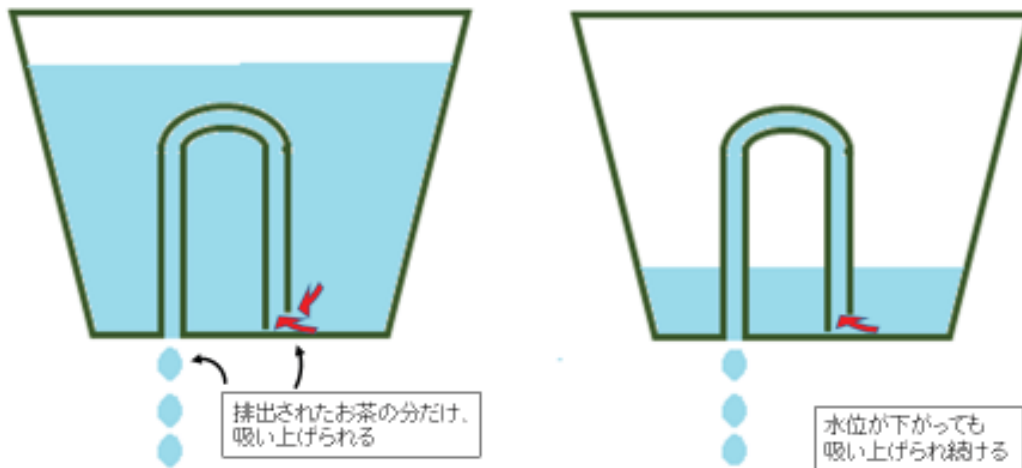


その理由は「サイフォンの原理」にあり！！

茶碗にお茶を注いでいくと次第に水位が上がり、管の中にもお茶が入ってきます。このとき、水位が管の曲がる所を越えない限り、振っても傾けてもお茶が流れ出ることはありません。



水位が管の曲がる所より高くなるまでお茶を注ぐと、管の中はお茶で満たされます。その後、管を通ったお茶は、重力により茶碗の外へ排出されるのですが、お茶で満たされていた管は、排出されたお茶の分を補うように器の内部にある穴からお茶を吸い上げます。お茶はどんどん零れていき、同時に器の中のお茶はどんどん吸い上げられていきます。その結果、茶碗のお茶がなくなってしまいます。



この仕組みは「サイフォンの原理」と呼ばれ、身近なところでは水洗トイレや灯油ポンプに、この原理が使われています。

教訓茶碗の原型は、約 230 年前の石垣島宮良殿内に渡来物として贈答された物で、宮良家では家宝同様に扱い、大切に保管していました。来客があれば、それを見せ、あるいは使って「驚き」を分かち合い「教訓」話に華を咲かせていたようです。米子焼工房の勝連さんは、この面白い茶碗を再現し、石垣島の名産にしたいと考え、宮良家もそれを快く協力を承知し、完成したものがこの教訓茶碗です。石垣島に行く機会があれば、お土産候補の一つにいかがですか？ (HAL)

参考文献 米子焼工房HP

(http://yonekoyaki.com/web_shop/products/detail.php?product_id=335)

神奈川の理科教育を考える集い (<http://sai.ooiso.net/r19/991223/000.html>)